

目次

「愛」の智将 直江兼続 / 5	大坂冬の陣 / 80
誕生 / 11	兼続の死 / 83
上杉景勝と兼続 / 16	
御館の乱 / 22	資料編
直江家を継ぐ / 28	直江兼続が嫡男平八景明に
新発田重家の謀反 / 36	宛てた書状 / 86
佐渡平定 / 44	直江兼続関係人名 / 92
小田原攻め / 49	直江兼続関係史跡 / 97
文禄の役 / 51	樋口氏系図 / 102
米沢入城 / 55	直江氏系図 / 104
関ヶ原の合戦 / 61	春日山城とその支城 / 106

戦国時代のおもな城館跡 / 107

御館の乱関係図 / 108

直江兼統関係年譜 / 109

参考文献 / 115

本書は、花ヶ前盛明編『直江兼統のすべて』(新人物往来社 一九九三年第一刷発行)の花ヶ前盛明執筆部分を基に大幅な加筆をしたものです。

表紙写真

表紙一

直江兼統公所用甲冑・愛の前立の兜(上杉神社蔵)
集古十種より直江兼統肖像(福島県立博物館蔵)

表紙二

直江兼統公所用甲冑・愛の前立の兜(上杉神社蔵)

表紙三

直江軍軍旗(最上義光歴史館蔵)

表紙四

(左から)

直江兼統公銅像(与板歴史民俗資料館前)

直江軍軍旗(最上義光歴史館蔵)

浅葱糸威錆色塗切付札二枚胴具足(宮坂考古館蔵)

「上杉景勝 直江兼統生誕之地」碑(坂戸城)

「愛」の智将 直江兼続

アメリカのケネディ大統領（第三十五代、任期一九六〇―六三年）が日本人記者団の質問に対して、「日本で一番尊敬する人物は上杉鷹山です」と、答えたという。

鷹山（治憲）は財政難で苦しんでいた米沢藩（山形県米沢市）九代目の名君である。その鷹山が師と仰いだのが、上杉景勝の家老直江兼続であった。兼続こそ、名参謀・名軍師で、経営家であったのである。

兼続は、豊臣秀吉をして、「秀吉嘗て曰く、陪臣にて直江山城、小早川左衛門、堀監物杯は天下の仕置するとも、仕兼間敷者なりと、称誉せられけり」（『名将言行録』） 天下の政治を安心して預けられるのは、直江兼続など数人にすぎない と言わせたほどの賢臣・智将であった。徳川家康でさえ、一目置いていたという。

江戸時代初期の儒学者藤原惺窩（一五六―一六一九）が、文武両道に通じた戦国武将の一人に兼続をあげていることでも、うなずける。

上杉家の浪人門田造酒之丞の物語るところによると、「直江山城は大男にて、百人にもすぐれたるもつたいて、学問詩歌の達者、才智武道兼ねたる兵なり、恐らくは天下の御仕置にかか

り候とも、あだむまじき仁体なり」(『常山紀談』)と、また、「長高く姿容美しく、言語清朗なり」(『名将言行録』)とあるように、兼続は身体強健、頭腦明晰で、文武両道に秀いでた名将・智将であった。

豊臣秀吉が死去すると、徳川家康は慶長五年(一六〇〇)六月、会津(福島県会津若松市追手町の若松城)の上杉景勝征伐の軍を起こした。西軍の將石田三成に拳兵させて豊臣家を打倒し、徳川政權を樹立するための誘導作戦であり、老獪な家康の畷であった。

家康が会津征伐に向かうと、三成は兼続と音信を通じ、七月、拳兵に踏みきった。家康は待つてましたとばかりに西上し、九月十五日、関ヶ原の合戦で西軍を破り、霸權を掌中におさめた。

兼続は上杉家の安泰のため、家康の子息(二男)結城秀康を頼った。そのため、景勝は会津百二十万石から米沢三十万石に減封されただけで終わった。このときの兼続の情勢判断、政治工作は、実に見事であった。兼続の手腕で、上杉家は米沢城(山形県米沢市丸の内一丁目)三十万石にとどまったのである。

兼続は、民政にも優れた手腕を発揮した。新田開発・水利事業・商工業の振興・農作物の栽培奨励・鉾山の採掘など、殖産興業に力を入れた。

一般庶民の衣料として大切であった青苧や漆・楮(紙の原料)・紅花などの栽培を奨励した。

みずからも『四季農戒書』という農業の手引書を出版し、農作物の増産を図った。

また、立岩喜兵衛・志駄義秀に命じて佐渡金山（新潟県佐渡市）・高根（鳴海）金山（新潟県

村上市）・上田銀山（新潟県南魚沼市）の開発に力を注いだ。慶長三年（一五九八）の豊臣家の

『伏見蔵納目録』によると、

越後黄金山 一、一二四枚四両一匁四分二厘

佐渡黄金山 七九九枚五両一匁六厘

とある。越後と佐渡をあわせると、全国総生産額の六割を占める。驚くべき数字である。

一方、学問を好み、たくさん書籍を収集した。また、詩文には卓越した才能を発揮し、秀作を遺した。

失題

春雁似_レ吾吾似_レ雁

春雁_{しんがん}吾れに似_にたり吾れ雁_{がん}に似_にたり

洛陽城裏背_レ花帰

洛陽_{じやうり}城裏花_{そむ}に背_むいて帰る

は、もつとも人口に膾炙している作品である。

天正十六年（一五八八）に妙心寺（京都府京都市右京区花園妙心寺町）の南化玄興和尚から

借りた『古文真宝抄』（中国の先秦以後、宋までの詩文を集めた書物）二十三冊を、文禄元年

（一五九二）に肥前の名護屋（佐賀県唐津市鎮西町名護屋）で朝鮮へ渡るまでの間に、医学書、濟

世救方』二百巻を書寫した。

慶長十二年（一六〇七）三月八日、京都の日蓮宗要法寺で『文選』（周から梁に至る文章・詩賦などを集めた書物）六十巻、三十冊を出版した。世に「直江版」といわれ、徳川家康の師林羅山（一五八三—一六五七）も賞讃したほどである。これは日本の銅活字本のはじめで、後世に与えた影響はきわめて大きい。

兼続には、逸話が多い。

聚楽城にて、諸大名並居たる中に、伊達政宗懐中より金銭取出し、人々に見せられしに、其頃金銭の始まりし頃にて、珍しとて、既はやさる、兼続にも之を見られよとありし時、兼続扇の上に金銭を置いて、打返し、女童の波根突く様にして視しかば、政宗否苦つも候はず、手に取られよと言も終らぬに、兼続、謙信の時より先陣の下知して、魔取り候手に、斯る賤き物執れば汚れ候故、扇に載せて候とて、政宗の方に投げ戻せしかば、政宗大に赤面せりとぞ、『名将言行録』。

聚楽第（京都府京都市上京区千本丸太町付近）で伊達政宗が懐から大判一枚を取り出し、諸大名にみせびらかした。兼続が扇の上にのせて見てみると、政宗は「手にとってよく見よ」と声をかけた。すると兼続は「謙信公のときより采配をとった手で、このような賤しきものは持

てない」と、政宗に投げ返したという。

兼続の治績の一部をあげてみた。まさに兼続の魅力であると同時に、人気の秘密でもある。経済界の不況が続く今日、兼続のようなリーダーの登場が望まれる。ぜひとも兼続の人となり、民政・経営の手腕を学ぶ必要がある。今日、兼続が見直される所以^{ゆえん}である。



直江兼続公銅像

(与板歴史民俗資料館・新潟県長岡市与板町)

誕生

直江兼続は永祿三年（一五六〇）、樋口惣右衛門兼豊（92頁）の長男として、坂戸城下（新潟県南魚沼市坂戸）で誕生した。しかし誕生の月日、場所は不明である。

幼名「与六」、加冠して「兼続」と称した。

坂戸城（97頁）の位置する上田荘は、越後から三國峠を越えて関東へ通る街道上にあり、古代から軍事上重要な根拠地であった。R六日町駅前立つと、眼前に坂戸城の勇姿を仰ぐことができる。標高六百三十四メートルの堅固な山城で、国の史跡に指定されている。南魚沼市役所前に「上杉景勝・直江兼続」のレリーフがある。樋口氏は木曾義仲（一一五四〜八四）四天王の一人、樋口次郎兼光を祖とする。兼光の父が中原兼遠である。

兼遠は信濃国木曾郷樋口荘（長野県上伊那郡辰野町）に住み、木曾義仲を育てた。兼遠の子に樋口次郎兼光・今井四郎兼平・巴御前



集古十種より兼続肖像（福島県立博物館蔵）



「坂戸城跡」碑



坂戸城跡

がいる。とくに兼平は根井行親・楯親忠とともに義仲四天王と呼ばれた。豪快無双の勇将であった。

巴御前は義仲の側室となり、一騎当千とうたわれた女武者であった。義仲が近江国粟津（滋賀県大津市粟津町）で討たれると、越後に逃れたと伝えられている。

兼光より十三代目の兼定のとき越後に来て、魚沼郡上田莊坂戸城（新潟県南魚沼市坂戸）主長尾家に仕えたという。

江戸時代中期の朱子学者新井白石（一六五七～一七二五）の『藩翰譜』に

兼統は、樋口与三左衛門と云ひし柴薪つかさどり者の子なり。彼が年十四、五の時、景勝、容顔の美麗なるを愛して近く召し仕ひて、寵愛浅からず。成人の後、我が家のおとなとせんと思ひしかど、宗徒の家人等、彼がもと賤しき者の子なり、夫れに肩を並べんことを悦ばず。爰に家の長に直江大和守が男子なりしかば、景勝、頓て兼統を其の婿にして直江と名乗らせ、山城の守と受領させ、終に随一のおとなとなしたり、と其の家譜